

鯉 種 苗 生 産 試 験

佐々木正明・山本 孝二・狩野 武俊

県東部の鯉種苗生産・配布を行い、併せて淡水魚の養殖指導と普及を行うことを目的とした。

生 産

今年は低水温のため、4月下旬に親魚の熟度を見ながら雌・雄の選別を行った。元池はミジンコの発生を促進するため、5月14日に乾燥鶏糞を m^2 当り0.5kg施肥した。ミジンコの発生は良好であったが、池によりカイミジンコの大量発生があった。産卵は、5月17日の午前中に親魚を産卵池に放養したが、水温が低かったため、18・19日の両日で産卵を終えた。その後の経過は良好であった。ふ化期間中は、水生菌の発生を防ぐため、1日置にマラカイトグリーン5ppmで40分間の消毒を行った。

毛仔の放養時にカイミジンコの大量発生があったので、毛仔に及ぼす影響について観察を行った。方法は、1♂ビーカー4個を使用し、これに元池の水と共にカイミジンコも採集し、毛仔を100尾づつ放養した。放養後3日間は無給餌で行い、後の7日間はミジンコを給餌した。

この結果、放養2日目に各ビーカーに3尾・2尾・2尾・4尾のへい死魚を確認し、それ以後のへい死はなかった。2日目のへい死は、ビーカーに放養する時の取扱に原因があるように思われ、この期間中の結果からすれば、カイミジンコによる影響は見られなかった。カイミジンコの影響については、今後も継続して毛仔と他のミジンコに及ぼす影響について観察を行う必要がある。なお養成池のカイミジンコ発生池の毛仔も順調に経過した。

青仔・責仔の養成は、病気の発生もなく順調であり、青仔の歩留りが65%であった。しかし、責仔は取場前の10月18日の20号台風の集中豪雨により、全池が冠水し大量の種苗の流失があり、歩留りが36.1%と悪い結果であった。

配 布

生産種苗の配布は表1の通りである。

表1 鯉種苗生産結果

種 別	稲田用	放流用	留地用	合 計
真 鯉	92,500尾	40,000尾	6,000尾	138,500尾

実道湖漁協の依頼により、3月に諏訪湖産ワカサギ卵5,000万粒、5月に大阪産カワチブナ卵100

万粒のふ化をして宍道湖に放流した。ふ化率は、その期間中にマラカイトグリーンで1日置に消毒し水生菌の発生を防いだが、ワカサギ86%、カワチブナ82%であった。

カワチブナは、毛仔の一部を元池2面(1面282m²)を使用し、5月22日~7月16日の55日養成を行った。その方法は鯉と同様で、元池にミジンコを発生させて毛仔を放養し、4日目より粉末配合飼料を水に溶き、水餌として池壁周囲に均等に1日3~4回散布給与した。10日目より粉末配合飼料を練餌として1面6~8個所に吊餌として給与した。養成期間中は病気の発生もなく順調であった。歩留りは71~74%であった。取揚げた稚魚は宍道湖に放流した。養成結果は表2の通りである。

表2 カワチブナ種苗養成結果

養成期間	放養尾数	取揚尾数	平均重量	歩留
S55.5.22~7.16	10万尾	71,764尾	0.95g	71.76%
〃	5	37,185	1.85	74.37%